次回の定期演奏会をちょっと予習

山野雄大

第205回定期演奏会「チェコの香り」

2024年7月12日（金）18：00開場　18：45開演
愛知県芸術劇場 コンサートホール
指揮/レオシュ・スワロフスキー（名誉音楽監督）
ドヴォルザーク：序曲「謝肉祭」 Op.92, B.169
スメタナ：連作交響詩「わが祖国」（全曲）

マエストロ大友と共に、フィンランドの大作曲家が生んだ音風景をお楽しみいただいている本日に続いて、次回の第205回定期演奏会（7月12日）のテーマは《チェコの香り》。セントラル愛知交響楽団を最近はじめてお聴きになった、というかたにもぜひお聴きいただきたいコンサート‥‥というのも、指揮台にお迎えするレオシュ・スワロフスキー名誉音楽監督は、2014年から19年までセントラル愛知響の音楽監督をつとめて、楽団の音楽を深く耕したマエストロ。退任後も楽団との絆を大切にしてくださっているチェコ出身の名匠が、得意なお国ものの中でも、とりわけ特別な存在であろう大曲 ——スメタナの連作交響詩《わが祖国》を（大人気の第2曲《ヴルタヴァ（モルダウ）》はもちろん、チェコの色と薫りあふれる全6曲をすべて）指揮するのです。併せて、ドヴォルザークの人気曲、序曲《謝肉祭》も華やかに！

マエストロ・スワロフスキーは在任中、特にチェコ音楽の名曲から珍しい傑作まで、幅広いレパートリーを手がけてプレイヤーにも聴衆にも愛されました。スメタナやドヴォルザークの代表作たちはもちろん、魂の慟哭を刻んだ傑作・スーク《アスラエル交響曲》など演奏至難な大曲もとりあげ（当時おそらく、日本でいちばんチェコ作品を集中して演奏していた楽団だったのではないでしょうか？）、オーケストラの表現力をぐいぐいと深めてみせました。

今春、楽団は愛知県芸術劇場コンサートホールに定期演奏会の会場を移し、マエストロ角田鋼亮を新たな音楽監督に迎え‥‥と大きな一歩を踏み出しました。このタイミングで、楽団の礎を強く固めたスワロフスキー名誉音楽監督をお迎えして、チェコ音楽の金字塔《わが祖国》を共演するということには、とても大きな意義があります。オーケストラが培ってきた表現力の豊かさを、さらに深く！ この瞬間に、ぜひ立ち会ってください。

◆チェコの名匠スワロフスキーを迎えて！

マエストロ・スワロフスキーは1961年チェコ生まれ。巨匠指揮者ノイマンの最後の弟子として薫陶を受け、デビュー後はチェコやスロヴァキアの名門楽団でポストを歴任してきました。ドイツをはじめ全欧で活躍するほか、日本にもブルノ・フィルやヤナーチェク・フィルなどチェコの楽団を率いて何度も来日公演を重ねているほか、東京都交響楽団などへの客演でも名演を残してきました。

セントラル愛知響との初共演は2012年6月（第120回定期）、ドヴォルザーク《スラヴ舞曲集》全曲という（プレイヤーにとってはなかなか挑戦的な）プログラムでしたが、マエストロが引き出す豊かな音楽に楽員も聴衆もすっかり魅せられてしまい、2014年春から音楽監督にお迎えしたのでした。

CD録音もチェコ作品を中心に数々重ねていますが、ドヴォルザーク渾身の宗教曲《スターバト・マーテル（悲しみの聖母）》をブルノ・フィル他とライヴ録音した盤［1996年録音／Supraphon］や、同じドヴォルザークが古い時代のチェコに題材をもとめたオラトリオ《聖ルドミラ》を、スロヴァキア・フィル他と録音した美しい演奏［2015年録音／Naxos］など、規模の大きな作品にも優れた手腕を発揮。残念ながら《わが祖国》全曲録音はまだありませんが、だからこそ、次回定期の実演でその確かな構築力を味わっていただきたいと思います。

◆チェコ音楽の魅力 —— 歴史と自然、誇りを描いて

チェコという国は、長い歴史のなかで激変にもみくちゃにされ続けてきた地域でもあります。現在の国名で言えば、西にはドイツ、南にはオーストリア、北東にはポーランド、さらにスロヴァキアやハンガリーといった国々に囲まれているわけで、絶えず周囲の脅威にさらされる位置にあります。長らく他国の支配下に置かれる苦汁をなめ続けてきたぶん、独立への強い意識も持ち続けていました（ご興味あるかたへの入門書として、薩摩秀登、阿部賢一編著『チェコを知るための60章』［明石書店、2024年］が今、複雑な歴史や多彩な文化など、各分野の層の厚い専門家たちが分かりやすく案内してくれます）。

独立の志 —— チェコの人たちの民族的な意識を強めるのに、大きな役割を果たしたひとつが、その豊かな音楽文化でし

た。もともと、東方のスラヴ文化、西方のゲルマン文化とがぶつかるその真ん中にもあたるチェコには、混ざり合うからこそ独特の豊かさが育っていました。19世紀には、〈国民楽派〉と呼ばれる音楽家たちの力強い活動が、チェコの人々の民族意識を強く結集させる後押しをするのです。そんな〈国民楽派〉の父といわれるのが、次回定期でその代表作をお聴きいただく作曲家スメタナ、そして〈国民楽派〉の代表的な作曲家として国際的な名声を博したドヴォルザークです。

チェコは西部のボヘミア地方と、東部のモラヴィア地方、北東部のシレジア地方に分かれています。それぞれ言葉や文化も異なり、それぞれの土地に根ざした音楽も違った特徴を持っていますが、次回定期でお聴きいただくスメタナとドヴォルザークは二人ともボヘミア生まれ、マエストロ・スワロフスキーもボヘミア出身です。

〈チェコ国民楽派の父〉ベドジフ・スメタナ（1824〜1884）といえば、《モルダウ》でしょうか。この曲は先述のように、次回定期でお聴きいただく連作交響詩《わが祖国》の第2曲なのですが、日本で知られている《モルダウ》はドイツ語読みで、チェコの人たちは《ヴルタヴァ》と呼びます。

ヴルタヴァは、ボヘミア地方を南から北へと流れてゆく大河の名前。しかし、この曲名はただ川の名前を冠したというだけでなく、チェコの人々にとっては民族のアイデンティティと深く繋がる、象徴的なイメージともなっています（内藤久子『チェコ音楽の魅力 ——スメタナ・ドヴォルジャーク・ヤナーチェク ——』（ユーラシア選書5）［東洋書店、2007年］を参照。この本はチェコ音楽を代表する作曲家たち、その創作と複雑な背景を丁寧にといてお勧めですが、版元がなくなってしまったため、図書館や古書店でお探しください）。

交響詩《ヴルタヴァ（モルダウ）》は、川が水源地（チェコ南部の国境地帯にある山のなか）から流れ出す様子を、せせらぎのようなフルートと水滴のようなつまびく音で表現しながら始まります。小さな流れはやがて河幅を広げ、農民たちの楽しげな舞曲も聴こえてきます。（音楽が一転して幻想的になると）月光のもと水の精が舞い‥‥流れはやがて急流にさしかかり（オーケストラも轟音に！）水はしぶきを上げます。川は古都プラハへゆったりと流れ込み、ヴィシェフラドの城の廃墟を仰ぎみながら、堂々たる流れとなって去ってゆく‥‥という一連を、オーケストラが描いてみせるわけです。

◆《わが祖国》は全曲聴いてこそ！

《ヴルタヴァ（モルダウ）》を聴いていると、説明なしでも多彩な光景が目に浮かぶのですから、つくづく凄い曲ですが‥‥この曲ばかりご存じのかたも、ぜひ連作交響詩《わが祖国》全曲をお聴きいただきたいと思います。6曲それぞれチェコの歴史や自然、民族の生きざまをオーケストラで（詩的に、そして力強く！）描き出した本作は、通して聴くとまたそれぞれが呼応しあって、イメージをより壮大に広げてくれるのです。

幕開けを飾る第1曲は（ヴルタヴァ川がそばを通り抜けた）プラハ郊外の古い城を描いた《ヴェシェフラド》。古い王朝時代からあった城の廃墟は、チェコの象徴としてあまたの歴史を見つめてきましたから、はじまりの曲にふさわしいですね。曲は吟遊詩人を思わせるハープではじまり、連作全6曲を通して現れるテーマも聴こえてきます。

第2曲《ヴルタヴァ》に続くのが、第3曲《シャールカ》で、これはチェコの古い伝説にでてくる女性の名前。第4曲《ボヘミアの森と草原から》では、美しい土地に生きる人びとの歌、心を満たす喜びや悲しみ‥‥さまざまな美しいイメージが響きます。第5曲《ターボル》と最後の第6曲《ブラニーク》はそれぞれ由緒ある地名ですが、それぞれ15世紀におこったフス戦争 —— キリスト教の改革者フスの一派が勇敢に外敵と戦い、チェコの民族意識を高めることになった、その英雄的な展開をあわせて描いています。フス派のコラール《汝ら神の戦士たち！》が2曲を通してあらわれたりと、続けて聴くと連作交響詩《わが祖国》が堂々と、見事なクライマックスを築き上げて聴き手を大きな感銘へと呑み込みます。

スメタナ自身が、書簡のなかでこの《わが祖国》全6曲について、それぞれどんな標題をもっているのかを詳しく記しています。これは、長年にわたってチェコ音楽の研究・紹介にも努めた音楽評論家・佐川吉男さんの、チェコ作品に関する曲目解説を集成した『佐川吉男遺稿集3　チェコの音楽 —— 作曲家とその作品』［芸術現代社、2005年］でも翻訳が読めますのでぜひ。

スメタナの大作に先立っては、アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）の序曲《謝肉祭》（《自然と人生と愛》と題した序曲3部作のひとつです）で、ボヘミアの明るい民族舞曲がはじけるさまを愉しんでいただいて‥‥ボヘミアのマエストロと共にお届けするチェコ音楽づくし、次回もこのホールでお会いいたしましょう！

やま の たけひろ
山野雄大

Profile

ライター［音楽・舞踊評論］。『音楽の友』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く　昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CD解説、オーケストラやバレエ公演の解説、歌詞対訳など多数。朝日カルチャーセンター新宿教室でバレエ音楽講座を開講中。